

## 第二百九十三話 特務機関の位置づけ、如何？

外国人がまとめた陸軍中野学校に関する網羅的な書籍がある。「陸軍中野学校の光と影 インテリジェンス・スクール全史」（スティーブン・C・マルカード著秋場涼太訳芙蓉書房出版）がそれである。中野学校に関する断片的な書籍は多々あるが、本書は中野学校の卒業生が大東亜戦争から戦後日本にかけて如何なる活躍・活動をしたのかを370頁に亘って活写しており参考になる。中野学校の存在した期間は、7年間（1938～1945）という短い期間であったが、彼等が果たした成果は誇られるべきものだ。中野学校、特務機関に関しては、[66話 特殊機関は悪か？](#) [163話 軍人らしからぬ者こそ！](#) [273話 もう一人のマレーの虎 怪傑ハリマオ参上等](#)に記述しているので参照して頂ければ幸甚である。



本書の読了にあたって幾つか述べたい。

- 1 元CIA情報分析官である著者が、大東亜戦争の戦争目的に理解を示す日本の戦争目的の一つである東南アジア諸国の欧米植民地からの解放のためにインド、ビルマ、フィリピン、蘭印等で中野学校卒の特務機関の要員が真摯に独立運動を支援したかが、温かい目で綴られる。
- 2 日本の中野学校を含む情報要員は、東南アジアのみならず本土決戦、対ソ防衛、朝鮮戦争等でも活躍、更には、GHQの情報活動を陰で支えた。それは、日本インテリジェンスの優秀さを示すものである。
- 3 受け継がれるもの（317p～332p）  
同書に曰く、受け継がれるものとして次の項目を立てて説明している。括弧書きは筆者。○切り裂かれたヨーロッパの植民地支配（帝国陸軍は時間をかけてアジアの民族主義者を育成し、現地軍を訓練していた。米OSSの分析（下記注1）） ○日本の歴史を創る影の戦士の活躍 ○情報機関（中野学校は大日本帝国が情報軽視をしてきた悲劇の典型） ○日本最後の軍人の晩年（小野田寛郎について） ○最後の追求（末次一郎について）  
注1：OSS（米CIAの前身）の分析（1945年8月）  
「ヨーロッパの植民地システムを破壊することで、日本は東南アジアの民族主義の大義を推進したように見える。日本は現地民に新たな自信を与えたが、同時に彼らがそれまでの生活に戻るのを不可能にした。（320p以下略）」  
\*日本では意図的に閑却・無視される戦争目的の相応の達成を認めているのだ。
- 4 残念なこと  
全特務機関は、理想に燃え、独立運動の志士と連携し、独立を果たそうと燃える若者を組織化し教育し植民地軍と互角に戦えるまでに育成した。このことは評価されてよい。ただ、本書でも特務機関、その上級部隊そして独立軍間の不協和音が綴られている。特務機関の上級部隊は、特務機関の活動を南方軍や方面軍の作戦に如何に寄与させるかを第一義に考えて現地独立部隊に掣肘を加えていたようだ。一方、現地独立軍は、ただただ独立のためだけに如何にあるべきかを最優先事項としており、両者の考えに次第に乖離がみられるようになった。その間にあつて特務機関（長）の苦悩も大きかったのではないだろうか？特務機関・謀略を陸軍が仕切ったことが問題なのか？いずれにしろ、この乖離が戦後関係に微妙に影響もしているようだ。ここに、大戦略（国家戦略、政略）のために如何にあるべきかを考察できなかった日本の限界があるような気がしてならない。短視眼的過ぎたと云ったら言い過ぎか？
- 5 初耳  
米軍本土進攻前に、皇統保全のために天皇・皇太子に次ぐ者を避難させる計画が秘密裏に進められつつあった。朝鮮戦争でも日本の情報機関のOBが活躍した。

（了）